

「ベニシアのエッセイ」

新井 宏

テレビはほとんど見ない。ニュースやスポーツの実況を別とすれば、たまに見るのは、「題名のない音楽会」と「小さなイタリアの村の物語」、そして「猫のしっぽカエルの手」くらいである。

「題名のない音楽会」は一九六四年に黛敏郎の司会で始まり、五十年を越す「世界一長寿のクラシック音楽番組」としてギネスにも登録されている。もちろん誰でも知っている。

「小さなイタリアの村の物語」も番組の回数を見ると既に二五〇回を超えている。日本テレビの衛星放送で、当初はそれほど目立たぬ番組だったと思うが、第一回の放送からちょうど十年目、どうやら同じ内容を二週連続して放送している他に、アンコール放送も二回ずつあるようなので、計算すると既に千回ほど放送されていることになる。だから「隠れた人気番組」などといったら叱られるであろう。

私たち夫婦もシチリアを含めてイタリアを一ヶ月ほど見て廻ったので、多少の土地勘もあり、妻が最初にはまってしまった。そして、たまたま一緒に見ている内に、これは「イタリア人の生活哲学」を主題とした番組なのではないかと思うようになった。とにかく、千人位の「小さな村」の主人公たちの語る言葉がどれを採っても、哲学であり詩なのである。

このことをぜひ『まんじ』に書きたいと思うようになってから久しい。ところが、いざ文章にしようと思うと、彼らの語った言葉があまりにも平凡で正確には思い出せず、私のつくり直した言葉では、とてもその味わいは伝えることができない。いつもそこで止まってしまっていた。どこかにシナリオでも出ているだろうと探したがまだ見つからない。

イタリアの小さな村の住人たちだけが、そんなに素敵な哲学や詩を語れるはずもない。製作スタッフがかなり

潤色しているであろうが、それにしても幼い頃から村の教会で馴染んだ「聖話」のフレーズが、ちよつと格好をつけるは無意識にでてくるのである。

さて次は「猫のしっぽカエルの手」である。京都大原に住む英国貴族出身の女性、ハーブ研究者・英会話教師・ベニシア・スタンリー・スミスの「エッセイ」である。

三年ほど前、妻と夕食を採っていたら、NHK衛星放送から、とにかく美しい「英語」が響いてきた。何を言っているのかさっぱり判らないが、前後関係や字幕から「英詩」らしい。聞き取れないのに「美しい英語」などと云うのは不遜であるが、ぜひもう一度聞いてみたいと思った。

それが「猫のしっぽ……」との出会いであった。

わずか一〜二分の「英詩」が現れる時間帯はその都度変わるようで、結局、三十分の番組をいつも全部見ることになった。しかし、最初「英詩」と思ったのは、どうも間違えて「ベニシアのエッセイ」というらしい。

しばしば見るが、なかなか聞き取れない。日本語でさえ、聞き取れない今日なので、耳の衰えかも知れないと音量を上げるが同じだ。リズムは、昔話の出だし「ワンSPAポンナタイム」に似ている。ただし、こんなうまい英語を久しく聞いてないとの印象は変わらない。

なぜ、そう思ったのか、散歩しながら考えた。それは小山台高校の英語教育にあったのではないかと。

英語が大嫌いで、英語が零点でも入れる大学に行く決めていた。しかし、クラス委員などをしていて、なにかと英語の先生とも「付き合い」が多く、最低限の勉強はしていた。特に、若い副担任の勢山先生はなかなかの美人、また通称「ロンドン乞食」という大島先生も、ロンドンに行ったこともないとの噂のなかでも「あの街角を右に曲がって……」などと授業で名調子である。ただし、共通していたのは、おそらく「米語」ではなく「英語」を教えていたのではなからうか。

宿題はいつも「英語の名文」の暗記である。その中には気の利いた「ことわざ」も多い。名文を暗記すると、それを適当に連ねれば、下手な英会話よりもはるかに高度な意思疎通ができる。

そのことから思い出したのが、G・ギッシングの『ヘンリー・ライクロフトの私記』である。英語副読本であった。ハードカバーの本だったように記憶するが、中学校でともに英語の授業を受けずに高校に進んだ世代なので、とにかく難しかった。

それが「米語」ではなく「英語」であったのは間違いない。「ロンドン乞食」が、あたかも犬養孝が万葉歌を吟ずるが如く、英語を読む。

もう一度「ライクロフトの私記」を眺めて見たい。探すが見つかるのは翻訳本ばかりで英語版はない。まあ良いかと、文庫本を入手して斜め読みする。

この本の作者ギッシングは「三文文士」を書いて有名だそうだが、一九〇三年に亡くなった人。翻訳書でも二十五万字くらいになる長編をギッシングはわずか七週間で書き上げたという。翻訳本で読んでも難しい。

何でこんな難しい副読本を採用していたのか調べて見てびっくりした。戦前の「実業補習学校」で多く読まれた「英文学作品」なのだと言う。

実業補習学校とは、尋常小学校または高等小学校を卒業して、既に働いている青年に対し、夜間に教育を受けた機関である。英語の素養などない生徒ばかりであったろう。要は「夜間高校」の生徒に対して『ヘンリ・ライクロフトの私記』を教えていたわけである。その要求水準の高さに、かつての「英語読解力」の高さが頷ける。いくら英会話ができて、読解力が不足する今日とは正反対だ。

残念ながら、私は小山台高校を卒業すると同時に「英語」とは決別してしまった。必要あって論文を読むことがあっても、相変わらず「英語」嫌いであった。

しかし、海外出張のチャンスがありそうなので「英会話」を始めたのは二十七才近くになってからである。セイ

ロンの大僧正と日系の母から生まれた退役米国人から個人レッスンを受けたが、完全な「米会話」で、「お前の英語」は「南部訛り」よりはマシだなどとおだてられていたが、そのため耳は「英語」から完全に「米語」にシフトしてしまった。

そこにベニシアのエッセイとの出会いがあった。ある種の感激であった。

相変わらず、耳にはとても心地よいのであるが、まともには聞き取れない。なんとか「ベニシアのエッセイ」の英文を読みたいと思うが、見つかるのは、日本語の字幕文ばかりである。エッセイ朗読の時に、字幕文を見ていると、すぐに耳がおろそかになってしまいうほど洗練された訳文である。

その字幕を眺めながら、どんな原文だったのか想像してみた。そこで思いついたのは、翻訳文の字幕文をインターネットの自動翻訳にかけてみることである。全てパソコン上でできて、手数はかからないので、十篇ほど翻訳して見た。

ちよつと紹介する。日本語が字幕文である。(NHK番組紹介「京都大原ベニシアの手作り暮らし」より)

私たちは四季を感じることで幸せな気持ちになります。

We feel happy by feeling the four seasons.

生命の編み物のようになって私たちをつないでいます。

It connects us like knitting of life.

私たちが心を開けば、周りにある植物や木々の鼓動を感じることができるようでしょう。

If we open our minds, we will be able to feel the heartbeat of the surrounding plants and trees.

毎日、私のハーブガーデンで時間を過ごすとき心配事やストレスが溶けて無くなっていくような気がします。

Every day when I spend time at my herb garden, I feel that worries and stress melt away.

これが字幕の日本語を英語に自動翻訳したままの英文である。いくつか翻訳して見るが、いずれも詩的なエッセイになっている。とても私の英語力ではここまでの英語にならない。経験からも言えることだが、正しい日本語を入力すれば、かなり正確な英語が戻ってくる。

韓国の学生の英語を添削しながら思ったことがあるが、韓国の学生の「韓国語力」は絶対に私の「韓国語力」以下だと。要は、私の日本語の方が、彼らの韓国語力よりも勝っていると云っているだけなのであるが、論文はもちろんのこと、詩や歌であっても、その背景に論理性がなければ、とても読めない。だから素敵な日本詩を英訳すれば、素敵な英詩が返ってくるはずである。

そして、突然、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の英訳を調べて見たくなった。

雨にも負けず

Unbeaten by rain

風にも負けず

Unbeaten by wind

雪にも夏の暑さにも負けぬ

Unbowed by the snow and the summer heat

丈夫なからだをもち

Strong in body

慾はなく

Free from greed

決して怒らず

Without any anger

いつも静かに笑っている

Always serene

……………

そういう者に私はなりた

Such a person I want

to be

(<http://www.pictio.co.jp/museum/>)

多くの人によって練られた訳詩のようであるが、原詩の雰囲気を実によく伝えている。

もちろん、「漢詩」を素晴らしい「書き下し文」で読んできた日本人なら誰でも良く知っている。言語も韻も完全に異なる「漢詩」よりも、何故か「書き下し文」の方が魅力的なことさえあることを。

春望 杜甫

国破山河在 国破れて山河在り

城春草木深 城春にして草木深し

感時花濺淚 時に感じては花にも涙を濺ぎ

恨別鳥驚心 別れを恨んでは鳥にも心を驚かす

月下独酌 李白

花間一壺酒 花間一壺の酒

獨酌無相親 独り酌んで相親しむもの無

舉杯邀明月 杯を挙げて名月を迎え

對影成三人 影に対して三人と成る

ベニシアのエッセイの原文を知りたい。そんな思いが
ますます募った。

そしてついに『ベニシアの言葉の宝箱』（世界文化社）
という本を見付けた。対訳が二十七篇載っている。読ん
で見て驚いた。どのエッセイを読んでも、極めて平易な
英語なのである。どうしてこんなに簡単な英文が聞き取
れなかったのか。

One summer afternoon when I was a young child,

子供時代のある夏の日の午後、

*I decided to secretly venture out of my grandparents'
huge country estate and see what the world outside
looked like.*

私は祖父母の広大な屋敷からこっそり抜け出して、
外の世界を探検することにしました。

*My heart beating fast, I asked the gatekeeper to
open the gates, and I walked along the lanes and
came to the cottages in the nearby village of
Kedleston.*

ときどきしながら守衛さんに門を開けてもらい細
い道を歩いていくとケドルストンの村の集落に辿
り着きました。

Suddenly I saw my dream house:

そこに突然私の理想の家が現れたのです。

何と平易な英語であろうか。それが全く聞き取れな
ったのである。

このエッセイの中にもあるように、ベネシアの育った
のは名門貴族である母の実家、ダービー州にあるケドル
ストン・ホールである。映画『ある公爵夫人の生涯』の
ロケ地になった豪邸で、八二〇エーカー（百万坪）の敷地
というから、ゴルフ場がいくつも入る大きさである。

その名門貴族の出身のベニシアは、貴族社会に疑問を
持ち、インドを旅して一九七一年に来日、京都で英会話
学校を始め、九四年に山岳写真家の梶山正と再婚、九六
年に大原にある築百年の民家に移住して、ハーブを取り

入れた手作りの暮らしをしているという。一九五〇年生まれ。貴族社会に疑問を持ったのは、おそらく次のエッセイとも関連するのであろう。

As a child, my father would always read to me when he came to visit.

子供の頃、父は会いに来てくれると、必ず本を読んでもくれました。

At seven o'clock, he would come to my room to read me a story a chapter a day of a classic children's book

夜七時に部屋に来て……………子供向けの名作を一日一章ずつ読んでくれました。

He was a natural actor and loved to change his voice, and act out each story to make me laugh.

生まれながらの俳優だった父は、声を変えたり、身振りをつけての朗読で笑わせてくれました。

ベニシアのエッセイ朗読に「ワンスアポンナタイム」のリズムが色濃く感じられるのは、おそらくその時の影響なのであろう。奔放な貴族育ちの母と「生まれながらの俳優だった父」は、ベニシアが二歳の時に離婚している。

もつとも俳優といっても大金持ちの出身と云うから、

「芸能人」であったわけではないが、そこに「貴族社会への疑問」の原因もあつたのではなからうか。

ベニシアの笑顔を見るとはっとするような美人にみえる。しかし、その半面、厳しい表情になると、アーサー王を囲む円卓の騎士を思わせるような男性的な顔つきになる。それが貴族の顔なのであろうか。

ところで、ベニシアのエッセイの原文を探している内に、ベニシア自身が、「ベニシアのエッセイ」のことを「ベニシアの四季の詩」と名付けているのを知った。やはり、これは「詩」だ。

それにしても分かりもしないのにベニシアのエッセイについて長く紹介した。それには若干の心積もりがあつてのことである。

『まんじ』に参加して十七年。その間、いつか「香りのある文」を書きたいと思いつながら、未だ目的を果たしていない。いつも納期が迫ると急いで「雑文」を書いて間に合わせて来た。強いて云えば、「エッセイ」と云えるかも知れないが、ベニシアとは雲泥の差である。

その過程で、『まんじ』で最も多く学んだのは、「漢詩」と「短歌」である。必ず合評会があるので「しっかり読んでも行かない」と宿題を忘れた生徒になってしまう。同人

の小説類からも多く学んだが、いつも時間をかけて読んだのが漢詩と短歌であった。

自分でも詩を作りたいなどと考えていたわけではない。せめて。その「漢詩」や「短歌」の約束事や歴史だけでも勉強しておきたいとの思いであった。だから鯨海さんの「漢詩」はもちろん、曾根竣作さんや石黒修身さんの「短歌」や「評論」からは非常に多く学んだ。ある意味で、『まんじ』の合評会は、私にとつて、漢詩と短歌との出会いであったと云っても過言でない。だから時には不遜なことを云いながらも、実は諸先輩に非常に感謝しているのである。

振りかえってみれば、『まんじ』には、自分の書きたい事ばかり書いてきた。「書きたい事」を書いているのだから、満足感はあるが、不特定の読者からも評価を受けたという気持ちは途中から完全に失せていた。しかし、いつかは再挑戦してみたいと、このところ「題材」を拡げていた。習作として、北上夜曲、千の風、赤毛のアン、月は上りぬ、遥かな友に、などを題材としたが、いずれでも「歌」や「詩」を採り上げている。

ただ、相変わらず、それが理屈っぽい「解析」から脱皮していない。

詩には果たして「様式美」が必要なのだろうか。

和歌・短歌の歴史を学ぶと、「本歌取り」のように、集

成された様式美を尊ぶ流れに対し、「万葉」に戻ろうとする流れがあったという。様式美は「良いもの」を「定石化」したものであるから、学べば常に一定水準のものが書ける。しかし、そこには、かならず純粹培養(形式化)と、はみ出すものを排除する世界が生まれる。

人間の耳に心地よく響く言葉のリズムが、五・七・五の定型だと云う。五言絶句、七言絶句なども漢字一文字が一音節であるから、その例に入るのだろう。

しかしそうともいえない。世界的に見て、五音節、七音節の響きが良いと決まっているわけではない。日本にだって、いくらでも例外がある。

うさぎおいし かのやま

こぶなつりし かのがわ

ゆめはいまも めぐりて

わすれがたき ふるさと

まどは よつゆに ぬれて

みやこ すでに とおのく

きたへ かえる たびびと ひとり

なみだ ながして やまず

ゆうやけ こやけの あかたんぼ

おわれて みたのは 一つのひか

やーまの はたけの くわのみを
こかごに つんだは まぼろしか

詩に定形化が必要であり、リズムや韻が重要なのは理解している。いや、わかりきっている。しかし、「ベニシアのエッセイ」を読んで、あらためて思った。詩は、美しい韻や心地よいリズムが、耳や目に心地よく響くばかりでは足りない。平易な文章であっても、ベニシアが童話を読むかのように、そこに「詩心」を与え、聞く人の心に響かせるものこそ「詩」なのではないかと。

最近、鯨游海さんに薦められて正岡子規の「歌よみに与ふる書」を読んだ。冒頭から、子規がかつて崇拜していた「古今集」を「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」と痛快である。いわば日本独特の「様式化」や「家元制度」への批判であり、これが明治の風潮に受けたのであろう。

しかし、世界の東端に位置し、流れ込んできた多くの文化を「様式」として完成させたのが日本文化の特徴であり、「家元制度」はその「傑作」ともいえるものである。子規が痛烈に批判した「古今集」も「歴史遺産」を生きたまま千年も伝えたものと考えれば、自ずから評価は異なる。

日本における「漢詩」とは、主として唐の「五言絶句」や「七言絶句」を意味するらしい。しかし中国には「宋词」と云う宋代以降に隆盛を極めた韻文の形式もあると云う。一句の文字数が一定でなく、長短不揃いであり、句数も色々あるとのこと。そう思ってみれば、「唐詩」のルールに極めて忠実に、江戸期・明治期の教養人が確立した日本の「漢詩」の様式美は、今や本家の中国でも希薄になっている。

唐詩の平仄や韻の規則、「康熙字典」の字画を忠実に守ろうとする「漢詩」も、日本の誇る「家元制度」と似ているが、時には良寛の漢詩のように熟知していても「平仄」には拘らない大らかさに魅力を感じる。

そのため、酒席では「漢詩保守派」に向かって何かと毒づいているが、それはまず学ばなければ絶対に近寄れない「漢詩」のアプローチの長さに辟易して不満を述べているだけなのかも知れない。いわば私の小山台高校時代の「英語嫌い」と根は同じなのであろう。

京都大原三千院は私達が五十年ほど前に、新婚旅行で回った思い出の地である。